HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	デカルトにおける自然學の位置
Author(s)	花田, 圭介
Citation	北海道大學文學部紀要, 3, 19-36
Issue Date	1954
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33223
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P19-36.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

デカルトにおける自然學の位置

花田圭介

デカルトにおける自然學の位置

花田圭介

はしがき
1 「実際的哲学」
2 実験
3 機械的自然
4 神事と俗事
5 仮託の論理
（未完）

はしがき

《In Rücksicht auf das äusserliche Geschichtliche des *Lebens* der Philosophen ……》—— Hegel

古代の哲学者たちを「イデーの裡に留まる die plastischen Individualitäten」と呼ぶことの是非はともかくとして、近代の哲学者たちの「生活」に言及してヘーゲルの語つているところは、甚だ興味をそゝる。というのは、——「哲学者たちがその生活において荒々しく定めなく流浪した」「過渡期」の後に、「近時、外的世界は落着き秩序づけられ、ある共通の、分別ある連関が生まれ……そこで、この世の諸関係が尤もな、道理にかなつた仕方で組織された。」「……個人は、この外的生存の連関に否応なく立入らざるをえない。」「勇気」という一事をとつてみても、それは各人が己れの思うところを敢行することではもはやありえず、他者との連帯に敢えて身を委ねることをいみする。哲学者も、こゝでは、「内的目的、かれの精神生活が外的関係をも規定していた」彫塑的人間像ではもはやありえない。で、内的世界の教化と外的世界の秩序とにたいして、以前とは異つた関係がとり結ばれるにいたる。「かの共通の分別ある連関はあらゆる個人を捲き込むほどの力をもつてはいるが、だが、と同時に、ある内的世界がうち建てられる。内的なるものと外的なるものとが、ともに独立して相互に依存することなく存立しうるように、そして、個人がその外的側面を外的秩序に委ねうるように、かように外的なるものがそれみずからと宥和するに到つている」。つまり、「衣裳を流行の偶然に任せる」ように、外的なるものを自己以外の秩序の偶然に委ね、しかも、それと同時に「自己の〔内的な〕目的に忠実である」こと——これこそが、「市民的諸関係、ないし、国家生活のうちに生きる」近代哲学者の生活について、ヘーゲルの画くところの姿に外ならない。[1]

確かに、疑いということにかんしても、周知のごとくデカルトは、古代「疑いに向つた人々がそれを生活上のもろもろの活動にまで及ぼしてそのため自己の行為に思慮分別を用いることをしなかつた」のに反して、哲学的な懐疑のために「生活を導く上のことでは真らしきものを疑つてはならぬ」ことをしばしば強調している。[2] すなわち、一方個人的、理論的な領域に於いて判断の依拠すべきものと、他方社会的、実践的な領域において行為の依拠すべきものとの分離が行われるわけである。だが、勿論、デカルトの場合、社会的な——ヘーゲルの用語によれば「外的生存の連関」の——秩序を定めるべき者は、「神がその民の主権者として定めた人々とか、予言者であるために十分な恩寵と情熱を与えて改

革を行わせる人々とか[3]」であつて、当時の個人としては否応なくそれに立入らざるをえないにしても、それをしも「分別ある」「尤もな」「道理にかなつた」秩序といえまいことは、プロシャ王国についてと同然だろう。

以上に画かれたかゝる近代生活の不充分さ、またその生活とデカルトの哲学思想との関係についてはこゝではともかくとして、つぎいてヘーゲルの付言している次ぎの結論は、今日アカデミー哲学徒としてデカルトを振返える場合、とくに深い示唆を含んでいるように思われる。「哲学者の身分は……なお組織されていない。アカデーミカーがいわばそうしたものであるが、だが、かような身分とても……身分関係の慣習のうちへとうち沈んでゆく」と。これは、ひいては今日のアカデーミカー、すなわち、《ブルジョワジーが……彼らのやとう賃労働者にかえてしまつた》ところの職業哲学者の位置を予示するものであるばかりでなく、かゝる位置から今日遡つてデカルトを見る場合にいわば一定の歴史的還元の必要を暗示するものである。すなわち、《つめたい「現金勘定」》のうちにある吾々は、デカルトの周囲に、吾々のものとは異なつた、ある程度《封建的な、家父長的な、牧歌的な関係》を多彩に配さなければならないし、かれの友人の僧侶や詩人や学者にはある種の《輪光》を、かれの家族関係にも一定の《感傷的なヴェール》を装わさせねばならない。いうまでもなく、この輪光をはぎとり、このヴェールをひき裂くことに着手した者、のみならずヘーゲルのいわゆる「内的なるもの」と「外的なるもの」との分裂離反を更に促進した者こそデカルトその人であつたといえばいえようが。したがつて、この、「熊の国」の女王に招かれて計らずもその地でこの世を去つた哲学者の生活を、さしあたり、『貧乏な楽師と雪の女王』の物語りに擬えることは、女性的な比喩の嫌いはあるにしても、その牧歌性を理由にしてはあながち郤けられるべきではなかろう。「……ところが、美しい歌を奏でてゆくうちにその楽師の指はますます凍つてきました。で、ふと曲が途切れたので女王が顔をあげてみますと、その貧乏な楽師は手足を展げ、青白く、動かなくなつていました。寒い宮殿のうちで凍えてしまつて[4]。」私は、合理主義者デカルトを見過るものと非難されるかも知れない。しかし私の言いたいことは、その後の合理主義がむしろ冷やかな打算に類似するものをもつているとしても、最初の、しかも血の通つた合理主義者が始めてまさにその合理主義者たろうと決意したそのときの感激は、《宗教的な熱狂や騎士的な熱情》と分ち難く結びついていた、すなわち、大きな苦悩を通じてのみ分ち得るものであつたという点にある。「デカルトを夢想家だとし、ニュートンを真の学者だとする」見方が一般に行われていた当時のイギリスからの『便り』でヴォルテールが、合理主義者デカルトをむしろ詩人に擬えているのは理由のないことではない、と私は思つている。「デカルトは生来想像力旺盛だつた。それゆえ、彼の内生活もその推論の方式もきわめて特異な色彩を帯びている。デカルトの想像力の豊富さはその哲学論文の中にもあらわれている。すなわち、それら学理書においてすら巧妙きわまる比喩がさかんに飛びだしてくるのである。デカルトの肌あいはむしろ詩人に近い。それが証拠には、晩年のデカルトはスエーデン女王クリスティナの求めに応じて即興詩を書いている。……[5]」

したがつて、かゝる苦悩、すなわち、ヘーゲルの言葉をかりれば、「自己との内的な戦い」と「諸関係との外的な戦い[6]」を伴い、それを介してその後に、否応なく彼をまき込んだ「外的秩序」にたいしては「暫定的道徳」をもつて自己を対処しつゝ、と同時にそこに建てられた独自の「内的世界」によつて外的自然の研究をおし進め、かつ新しい自然学をうち建てることによつてかえつてまたその「内的世界」をより確実なものとなした――かようなデカルトの生涯と哲学とが問題となるわけである。

（1）ヘーゲル全集（グロックナー版）、第十九巻。『哲学史講義、第三巻』、二七五―二七七頁。
（2）例えば、―『哲学原理』「序文（訳者に宛てた著者の手紙）」。
（3）『方法敍説』、第六部。
（4）Serrurier, Cornelia ; *Descartes*, 1951, p. 297.
（5）*Lettres Philosophiques* 或は *Lettres ecrites de Londres sur Les Anglais et autres sujets* (Jore 版)、第十四信。
（6）前掲書、二七六頁。

1 「實際的哲學」

《in singulis *vitae* casibus》

意志の自由に徳をもとづけるデカルトの道徳論が神とその摂理にかんするかれ自身の学理と確執するばかりでなく、溯つて彼の形而上学理論のみならずその自然学理論自身も――それらの原理としてたてられる『理性』が利害善悪の巷である「生活」に煩わされぬと主張されている、まさにその故に――既に「生活」との間に亀裂を孕んでいる、と、これは既にデカルト研究者によつて指摘されているところであるが、もしここで「生活」というそのことが、常に理性的な客観的認識を以つてしては竭しえない利害善悪の価値的性質を元来避け難く有するものであるとするならば、で、かかるいみでの生活の指導への関心を自然学並びに形而上学のいわゆる理論的諸学に対置して実践的態度と呼ぶならば、そのとき、少くとも十七世紀後半にたいしてデカルトの残した哲学史的問題――「物心分離」と「身心結合」、「能動作用」と「受動作用」、摂理と意志の諸問題――は、これらはすべて、かれ自身の理論的態度と実践的態度との間の不調和、不整合に根ざしていたと言えば言えよう。[1] ところで、私がいまデカルトの「実際的哲学」を特にとりあげる場合、私の関心の的となつているのは、むしろ、デカルトがその知的活動にあたつてある一定のいみでの理性への堅い信頼にもとづいてその「理性を正しく導い」ていつたその過程において、これも同様ある一定の内容をもつ彼の現実的生活をいかに導くべきかの関心が、暗に或は公然と、どのように具体化していつたかを定着することにある。つまり、言つてみれば、その理論的諸学をも含めて彼の哲学全体、というよりもむしろ彼の自然研究、自然学理論そのものが当時のいかなる現実によつて促がされ、かれ自身のいかなる現実的生活といかなるかかわりをもつていたか、を知りたいのである。

『哲学原理』「序文」[2]において、デカルトは、「哲学とは何か (ce que c'est que philosophie)」を問うて差し当りこう答えている。哲学とは普通よくいわれるように「智慧の探究」をいみするが、こゝに「智慧」というのは「諸事における思慮分別」のみにとどまらず、「人の知りうべきあらゆる事物についての完全な知識」、それゆえ「人間の知りうべき一切の事物の根拠を引き出せるような」「最初の原因から演繹されねばならぬ」ごとき知識のことであり、で、それは、「健康の維持 (la conservation de la santé)、あらゆる技術の発明 (l'invention de tous les arts) のためのものであり、と同じくまた生活の指導 (la conduite de sa vie) のためのものである」、と。これは、容易に、あの、一本の樹に喩えられた哲学の全体の姿を想像させる。「かようにして、哲学の全体は一本の樹のごときもので、その根は形而上学、幹は自然学、この幹から出る枝はその他のあらゆる諸学に当り、これらは大別して三つ、すなわち医学、機械学、倫理学にわかれる。」デカルトにおける自然学の位置はいわばこの哲学樹の幹に当るといつてしまえばそれまでのことであるが、問題はむしろ、彼の当時の現実における、その現実にたいする、デカルトの哲学的思索過程中の、かれの自然学の位置にあるといいたい。さて、直接健康の保持と連なる医学、技術の発明を生みだす機械学、生活の指針を与える倫理学こそ、譬えていえば「枝々の端」にある

「木の実」であつて、「哲学の主な効用（utilité）」はそれら「末の部門の効果」に依存しているわけであり、「哲学の全体を……示すには是非とも果されねばならぬ」ところであるが、このことは、当時のデカルトにとつて、なお未だ「殆んど何も知らない」と告白せざるをえないばかりか、後述の理由――多大の実験のための莫大な費用の、いなそれにたいする期待可能性の缺如――のために、その実施を断念せねばならなかつた。こゝから、かかる彼の断念を通して、今日吾々がデカルト哲学に強く見受けるあの専ら理論的―さきに実践的と対置されたいみでの―に留まらんとするかに見える態度が生まれてきたのである。《Je crois devoir dorénavant me contenter d'étudier pour mon instruction particulière.》したがつて、デカルトがその断念にも拘らず彼の諸原理から既に享けうると信じた実績が、たんに「真理発見の欣び」というごとき理論的な満足に止まるとしても、そこから直ちに彼の自然学の――ひいては形而上学さえもの――実践的関心を不問に付するべきではなく、また逆に、彼が「他の諸学の全知識を前提とし智慧の究極をなす最も完全な倫理学」として想望したところのものが恐らく推理と実験による理論的な内容をもつものであつたろうことを銘記する必要がある。

しかしながら、デカルトのとくに認識論についていわれる「理性の自律」の原理にのみもとづくかに見えるあの理論的態度は、それでは彼の現実的生活といかなる係わりをもつているのだろうか。かゝる問題は、完全な道徳が知られもせずまた大して彼の関心事となつてもおらず「仮の道徳」を日常の掟としていた頃の、デカルト自然学の実践的関心のあり方を明らかにする上からも、また一方、理性による意志の指導という理性主義が自然研究以来倫理学に到るまで終始一貫して支配的であつた、その理論的態度のあり方を明らかにする上からも、極めて重要である。

さきに掲げられた、哲学の三つの目的――それはかれ自身認めているごとく事実上獲られた成果からは程遠いものであるが――すなわち、健康の維持、技術の発明、生活の指針というこれら三つのものから、道徳にかんするその最後のものが問題にされていないという点で、差し当り、『方法叙説』中の次ぎの文段は甚だ興味がある。

「しかしながら、自然学（Physique）にかんする若干の一般的な着想を獲るやいなや、……それらは、人生のために極めて有用な（qui soient fort utiles à la vie）知識に達することの可能性を私に知らしめた……、また、学校で教える思弁的哲学（philosophie spéculative）の代りに、その着想から一つの実際的哲学（une pratique）を発見することができ、この哲学によつて、火・水・空気・星・天の、その他、私どもをとりまくあらゆるものの力と作用を、私どもは判然と認識するのである。……かくてものどもの力ならびに作用をそれぞれに固有な用途でひとしく私どもが用いることができ、で、私どもを自然界の主人にして所有者（maîtres et possesseurs de la nature）のごときものになしうることを、この哲学は私に示してくれたのである。かようなことは、土地から生まれるものを、そこに見いだされるあらゆる利便（commodités）を、なんの苦労もなく享有させるところの、限りなき技術的発明（l'invention d'une infinité d'artifices）のためのみならず、疑いもなくこの人生の第一の財宝で、またその他のあらゆる財宝の基礎である健康の維持（la conservation de la santé）のためにこそ望ましいのである。……」[3]

こゝで「この人生の第一の財宝（bien）」といわれている「健康」が、後に[4]、「存分の健康に恵まれている人々も欲せざるをえない」それ以上の「最高の善（le souverain bien）」によつてしのがれ、倫理学が公然と哲学の中心的な第一の目的とされるに到る、その経過は、あらゆるいみで大変興味深いが、こゝでは、デカルトがなお「道徳（mœurs）」の問題にかんしては一強いて何かを書かなければならぬとは少しも感じてい

なかつた当時における、彼のいわゆる「実際的哲学」の、生活にたいする有用性について先ず触れておこう。『方法叙説』は、いうまでもなく、『幾何学』、『気象学』、『屈折光学』の序論なのであつて、さきに掲げた「技術的発明」ということも『屈折光学』に説明されている望遠鏡の製作によつて例示されているような、そうした類の発明のことで、かゝる発明の有用性を介して「実際的哲学」と「生活」との結びつきを主張することが前の引用文の真意であつたといえよう。事実、デカルトは早くから屢々生活の用に資する機械、例えば重い物体を小さな力で揚げうるような機械等の説明を試みようとしているばかりか[5]、晩年一友人の求めに応じた彼のアカデミー案――これについては後に触れよう――に覗われるように、技術を介しての学問と生活との結びつきは、デカルトの生涯を通じての主要な趣旨の一つであつたとさえいえると思う。勿論この当時にあつても「生活のために有用な」ということのうちには、道徳的行為においても確信をもつて人生を渡ろうとする斜傾が既に潜在してはいるが、何れにもせよそこにはベーコンの「知ハ力ナリ」の主張が支配的であつたことは、前掲の≪maîtres et possesseurs de la nature≫ (Descartes) と≪naturae minister et interpres≫ (Fr. Bacon) というような、両人の字句上の酷似からばかりでなく一般に確証されるところである。

デカルトは、『規則論』においても既に[6]、「理性の自然の光を増すこと」を、「スコラのあれやこれやの難問を解くためでなく、生活の一々の場合において (singulis vitæ casibus) 悟性が意志に何を選ぶべきかを示すようにするため」のこととしている。で、これは、「純粋完璧な徳」としての、生活の智慧について思索をめぐらした晩年に到るまでの、彼の一貫した態度であつた。「智慧にはなくてはならない二つのもの、すなわち、まず悟性がおよそ善であるところのものを認識すること、それから、意志がいつもそれに従おうとすること」[7]。ところが、自然の討究にせよ道徳の探究にせよ、理論的研究をすべてこのように「生活の一々の場合において」構えているにしても、これらまさにその同じ引用文が示しているように、デカルトにあつては、また、その死に到るまで概して、悟性の認識が意志の選択、いな悟性へのそれの服従に先行していることが主要な特徴をなしている事実も蔽い難い。そしてこれこそが「理性の自律」というごとき主張の根拠でもあろうし、デカルトのいわゆる「効用」の説がかれ自身の理論的内容にたいして甚だ外的な独立的な付加物のごとき観を呈させている所以でもあろう[8]。学問の目的内容が比較的明確に意識にのぼつている晩年にかんしては、さきに引用した学問という「一本の樹」の譬えを借りれば、「枝々の端」に当る部分はいわば「根」から始まる理性の理論過程の後に「あとから解明される」という点にこのことが表われている。また、さきの『方法叙説』中の一文についてみても、自然の諸事物にかんし、それの判然たる認識が使用や効用に先だつている。こうした理性主義的な理論的態度の斜傾をデカルトの生涯において溯つてみるとき、吾々はそこにかれの生活そのものにおけるある一つの危機を想定しうる。すなわち、『規則論』によれば、「人生のために有用な (utiles à la vie)」ということはもはや――或はいまだ――「生活の利便のために有用な (utiles ad vitæ commoda)」ということではなく、またそれはなお「真理の観想において見出される愉楽に (voluptatem, quæ in veri contemplatione reperitur)」資するということでもない。「有用性 (utilia)」や「好奇心 (curiosa)」を極力郤けて専ら「智慧 (Sapientia)」のみを研究の「一般的目的と (finem generalem)」すること、しかもまさにかゝることによつてこそ「生活の一々の場合」を導かんとすること[9]、これはすなわち、デカルトにとつて、真の利便の資するべき、真の愉楽の見出さるべき生活そのものが――散発的に現われでているにしても――なお眼前に纏まりを見せていないことをいみする。ベーコンもまた「愉楽に資する宮廷の学問」と

「利便に資する隷従の学問」とにたいして学問の向うべきところを「生活」といつているが、いわば既存の「宮廷」の生活、「隷従」の生活に決然別れを告げたデカルトにとつて、かれの眼前にあつたものは、未だ空白未定の「生活」、「智慧」によつて後日かえつて形成せらるべき「生活」以外には何も存しなかつたのだ、と私は思う。「そこで、私自身のうちにか、あるいは、世界という大きな書物のうちに見いだされうべき学問のほかには、いかなる学問をも求めまいと決心し、旅行するために、……」[10]。

当時――ということは何も今日ではもはやそうでないといういみではないが――弁護士や財務官の職はいうに及ばず、口に「浄福」を唱える「聖なる」職業といえども、これら職業には、それら自身の中に一種の、詐偽が含まれていたのであつて、それはモンテーニュをしてこう言わしめる程のものであつた。「自ら清廉なる者は、その職業の不徳、ないし愚劣にたいして責任を持つには及ばぬ」[11]、と。それゆえ人生における「空しい名誉」、「卑しむべき利得」のためには、真理の探究ではなく狡智、詭計こそ応わしいものであつた。「この世で殆んど唯一の純粋な、かついかなる苦痛にも乱されぬ浄福」を口にするスコラ哲学は、それ自身まさに「愉楽」のための「愉楽」の哲学に外ならず、また、新しくこの世の「利便」のために――後に触れるごとく――無理にも用い続けられんとしていたスコラ自然学以外にはなんらの自然学も存しなかつた。血気がしばしば徳とされ、偽善家の篤信が賞め讃えられ、「朴訥が善良を生み、恐怖が敬虔となり、絶望が勇気を生ん」[12]でいた。真の徳、善、勇気はなお空白状態にあつた。そして、理性の自然の光にのみよる、既存の「愉楽」「利便」の転身のゆくえに、デカルトの「最高善」と「健康」と「技術的発明」とが、それらの資する「生活」そのものとともに、この新しき生活の「愉楽」「利益」の内容として、まさに彼自身によつて回復されたのだと私は思う。≪La conservation de la santé a été de tout temps le principal but de mes études.≫勿論、デカルトの著述の時期は、これらの内容が少くとも日常生活の漠然たるイデーとして浮び上つていた後に属するわけだが、かれがこれらを学問研究の特定の直接的動機としなかつたという、このことから、かえつて逆に、当初期待さえしなかつた豊かな成果が――デカルトによつて、またデカルトをこえて――招来されたのだつた。

以上要するに、私は、デカルトの哲学一般に見うけられるあの専ら「理性の自律」によるかのごとき理論的態度にかんして、それを、在来のスコラ学理論のみならず古い実践さえからの離反という危機と、理論の実践的成果にたいする断念とに劃される彼の学問生活に課せられたところの、新しい理論形成そのものによつてむしろ新しい実践を形成せねばならなかつた、その未完の劃期的任務によつて明らかならしめようとした。

したがつて、今日われわれの眼からみて、デカルトの理論にたいしてその実践的要求が甚だ外面的にみえるのは、その実践そのものの内容が当時なお未確定であつたという、まさにこの事実のために外ならない。それゆえ、なお付け加えるならば、かれの「実際的哲学」をたゞ文字面上の安易な連想から現代のプラグマティズムに結び付けること[14]は時代錯誤も甚しいものといわねばならないであろう。「かくして、ベーコンの有名な定式≪知ハ力ナリ≫を正当化した人こそデカルトなのである。だが、彼を以つてプラグマティズムの先駆者となすことは出来ない。なぜなら、真理をわれわれの物質的行動のその時々の成功にもとづけるようなことはせず、それどころか、理性的明証性をもとにして彼の確かめんとしたものこそが、この成功自身なのであるから」[14]。

(1) 桂寿一『デカルト哲学研究』、二二六―九、二五九頁。
(2) 『哲学原理』のラテン語本は一六四四年アムステルダムで、ピコ師による

(3) フランス語訳は一六四七年パリで刊行された。
(4) 『方法叙説』、第六部。
(5) 『哲学原理』「序文」。
(6) 同書及び全集（アダン、タヌリ版）第一巻、四三五―四四七頁。
(7) 『規則論』、I。
(8) 『哲学原理』「献辞（A la Sérénissime Elizabeth）」。
(9) 桂寿一、前掲書、二三〇頁以下。
(10) 『規則論』、I。
(11) 『方法叙説』、第一部。
(12) 『エッセー』、第三巻、第十章。
(13) 『哲学原理』「献辞」。
例えば、『哲学原理』Guy Durrandin 註釋本四六頁にはこう書かれている。《On peut remarquer que le critère que Descartes utilise ici est celui même que proposeront plus tard les〈Pragmatistes〉: la vérité d'une idée se mesure á sa fécondité.》
(14) Lavelle, Louis ; *La philosophie française entre les deux guerres*, 1942, p. 34.

2 實　驗

《l'école des arts et métiers.》

晩年デカルトは、一友人の財務官から、「人類の公的な効用のために」何事かをなしたいが、と意見を求められ[1]、それに答えて、「もろもろの技能を完成するため」の殿堂を建てるべきだとしているが、その結構は凡そ次ぎの如きものであつた。すなわち、――それぞれの職能に特定の仕事場を割り当て、教授されるべき技能のために必要な乃至は有用な機械をそれに附属の教室に設備すること。そして、実験に必要な出費のみならず、技能毎の各教師を支えるに足るだけの費用を支出すること。これらの教師は職人のいかなる質問に対しても解答を与えうるように、また、技能における新発見を促進するように、数学と自然学に堪能なるべきこと[2]。かゝる職能教育の計画は、直ちに「公的な効用」に便ずるためというよりは、なおむしろ自分自身の「もろもろの推理を検証するに足るだけの実験をすべて試みる便をえ」たいという、晩年に残された彼の一縷の希望を表わしてもいるのであつて、さきに触れた、莫大な費用の故のそれの実現の絶望に照応するものである。そこで私は差し当り、右に表明されている、自然学者と職人との緊密な結合ということに注目しながらデカルトにおけるかゝる計画の着想の伝記を辿つてみようと思う。そもそも、医学、倫理学、機械学の枝葉にまでも及ぶ推理を検証するに足るだけの実験は実に尨大なものであつて、「公けの人々の援助なしには個人の資力ではどうにもならぬ莫大な費用を要する」ほどであるという、こうした配慮――『哲学原理』フランス語版「序文」（一六四七年）における――は、確かに『方法叙説』（一六三七年）にまで溯ることができる。「……短命とか実験不足とかのために妨げられさえしなければ間違いなくその学問へと導いてくれる一本の道にめぐり会つたのだつたが、そこでこれら二つの障害に対する良策としては、自分の発見したものがどれほど僅少であろうとこれをすべて忠実に公けに伝えること、さらに、良識ある人々を促して、各人の傾向と能力とに従つて必要な実験に協力させ、また彼らの知りえたものをすべて公けに伝えるようにすゝめること――そして、後につゞく者が前人の到達したところから出発し、こうして多くの人々の生涯と勤労とを結束して、各人が個々になしうるよりも遙か遠くまで各人が一緒になつて前進するように、このためにそうすること、これ以上の良策はないと私は考えた[3]」等々。ところで、デカルトの学問研究にとつて、こうした「実験（expériences）」はいかなる射程と意味を有し、またそれにおける「職人（artisans）」との結び付きはいかに考えられていたのであろうか。

「本有観念」にもとづいて推理するところの、「コギト」の哲学者としての彼の意味は後にその輪廓を述べるごとく甚だ深長であるが、それと共に、「実験」に対する顧慮もまた意外に早くから彼の心を占めていた

事実に驚かされる。一六三八年彼はすでに「はや十五年以上も前に幾何学を放擲した」と告白し、以来「自然現象の説明を問題にし」ているといつているし[4]、またとくに解剖学的研究についてみても、翌三九年に彼の書いているところによれば、「それこそ、十一年間私が屢々携つた仕事」なのである。この間に始められた彼の実験は実に種々様々で、光の屈折、振子の振動、物体の落下、水の吸上げ、牛の心臓や肺の運動、魚や鰻の解剖、また、鶏卵や胎内の仔牛による胎生の観察[5]にまでも及ぶのであつて、その偉大さは、パスカルにあの有名な「プュイ・ドゥ・ドームの実験」の動機を与えたのが彼に外ならなかつたことを想起すれば足りよう。では、その間における「職人」との結び付きはいかなるものであつたか、この事情を調べることによつて、彼の「実験」の真意もやがて明らかになるだろう。

彼が「田舎者と交わり」一靴工を天文学者に仕上げたり[6]、また逆に旅案内人から気象の知識をえたりしていることはよく知られているが、ここでは、仔牛の解剖と屠殺業者というような外面的な関係ではなしに、実験において彼の理論と職人の技能とが一層親密に接合していた場合として、レンズ職人フェリエ (Ferrier) やまたヴィルブレシュー (Ville Bressieu) との場合を考えてみよう。先ずデカルトが早くからこの両人にたいして、彼等を自分の実験のための技能的協力者として嘱望していたことは明らかである。フェリエに宛てて、――「お別れして以来、私は例のレンズのことに就いて沢山の事を知り、……今では以前と違つて手を使う仕事に就いてはもう殆んど疑いがないくらいです。……そこで、われわれは一緒にいることが必要となる次第です。」[7]またヴィルブレシューについて、――「私の買つている点は、人から言い付けられたことを実行に移す手 (mains pour mettre en pratique) を彼が持つていることです」[8]。ところで、彼等との結び付きにおいて、凡そ次ぎの二つの困難が現われてくる。一つは、技能そのものに纏わりつく特種の困難であり、今一つは、彼等当時の職能人の頭脳を支配していた魔術的、錬金術的偏見に由るものである。例えば望遠鏡のレンズを磨く光学的教示がデカルトによつて正確に与えられたとしても、フェリエが実際にレンズを磨く段になれば、特定の手腕と熟練の上で様々の困難にぶつかる。「正確な楽譜が与えられても一日ではそれをリュネットで巧みに弾きこなせ」ないように[9]。これが第一のものであつて、こうした点に対する顧慮は――表向きにも――容易に『規則論』にまで遡ることができよう。

次ぎに、――デカルトがその少年期にジェズイットの学校で「教えられるものだけでは飽き足りずに、手に入りそうなものなら、最も秘伝的といわれ最も珍しいといわれる学理の書物をも、みな読みあさつた」こと、すなわち、その頃一種の革新的な思潮をなしていた占星術、魔術、錬金術[10]等に対しても一応の関心を抱いていたこと、これはよく知られているが、ところで当時の実験は一般にかかる「祕伝的」な学理にひたされていたのであつた。「魔術師がデーモンの力で現われるとしたという幻影」を、フェリエはレンズで巧みに映しだすことができたといわれ、こうした光学的魔術をデカルトは「下らぬことと」して軽蔑しながらも、なおそのレンズ職の技能に協力を求めざるをえなかつたのである[11]。また、実験技術に有能なヴィルブレシューにしても、「錬金術の些細に及んだ祕術を大いに心得ている全く稀妙な人間」なのであつた[12]。そこで、デカルトの理論形成において、こうした実験技能との接触面で、「私の哲学 (ma Philosophie) が印されていないような、いかなる実験にも、もはや一時たりとも停るまい」[13]という、つまり魔術からの解放という第二の困難が課せられることになる。そして、かゝる事情から次ぎのごとき彼の実験観の一面が生まれてくるのである。「それらの実験は、実験者が強いてそれを自分たちの原理と一致するもののように見せかけんとするために、ほとんどみな説明はすこぶる苦しげであり、あるいは

偽りでさえあるばかりでなく、かりに私に役立つようなものがあつたにしても、あらためてそれを選びわけるために要する時間を償うには足りぬであろう」[14]、と。したがつて、勿論、実験の成果を誤まれる原理から解放しなければならない。ところで、だが、それは、それ自身の法則によつて律せられているかのように主張される新しい説明原理の確立によつてのみ可能であつた。そして、まさにかゝる性質をもつ説明原理の主張の故に、デカルト哲学は、例えば「『原理』においてあらゆる自然現象を全般にわたつて説明しつゝ、……無生物体にかんしてなされうべきあらゆる実験を解明しているにも拘らず、……ありふれた哲学の諸原理に従う人々からはむしろ依然として実験の缺如を非難されつゞけた」[15]のである。かゝる「実験の缺如」という非難のうちに、当時の実験との結び付きにおける上述の困難を克服しつゝ、しかもその実験成果を諸々の誤まれる原理から解放するという任務、これこそが、デカルトの理性主義的な規則や原理の確立の課題であつた、と私は思う。scientia を artes と混同してはならない、デカルトは強くこう主張する。そこで、次ぎに、私は、かほどまでに技能と強く区別されて主張されるデカルトの学問原理の内容を、デカルトの理性主義的なその区別にも拘らず暗に、客観的に規定していたところの技術を顧みておきたい。これによつて、近世機械論的自然観の成立の事情にたいしても、やがて一側面からの参照の光があてられることだろう。

（1）デカルトはクリスティーヌ女王からも「科学アカデミー」設立のプランを求められた。なお、彼が本文中の殿堂の場所として主に「王立コレージュ」を念頭においていることは当時絶対王制確立期に特徴的である。《dans le collège royal et dans d'autres lieux qu'on aurait consacrés au public》
（2）バイエ『デカルト氏の生涯』、第二巻、四三三―四頁。
（3）『方法敍説』、第六部。
（4）メルセンヌ宛の手紙、一六三八年七月二十七日。
（5）一六四六年十一月二日の手紙。
（6）ホイヘンス宛の手紙、一六四七年十二月（?）。一靴工とは Direk Rembrantsz のこと。
（7）一六二九年六月十八日。
（8）メルセンヌ宛の手紙、一六四二年十二月七日。なおヴィルブレシューとの交際は既に遅くとも一六二八年以来のことである（バイエ、前掲書、第一巻、一三六頁参照）。
（9）『方法敍説』、第六部。『規則論』、I参照。なお、デカルトとフェリエとの往復書簡中特に次ぎのものを見よ。
Descartes à Ferrier, 18 juin 1629 ; Ferrier à Descartes, 26 octobre 1629 ; Descartes à Ferrier, 13 novembre 1629, 2 décembre 1630, Septembre 1638.
（10）ジルソン註釋本『方法敍説』、一〇九―一一〇頁。
（11）某宛の手紙、全集（アダン・タヌリ版）、第一巻、二十一頁。なお、『気象学』、Cogitationes privatae 参照。
（12）メルセンヌ宛の手紙、一六四二年十二月七日。
（13）同手紙。
（14）『方法敍説』、第六部。
（15）ホイヘンス宛の手紙、一六四五年六月。

3 機械的自然

《les machines que font les artisans et les divers corps que la nature seule compose.》

デカルトのいわゆる「本有観念」にかんして、ヴォルテールはかつて――ロックの影響のもとに――「生まれくる幼児が後年の諸観念を内在保有している」とのこの説を、「たんに才筆に溢れた一小説と少しも異らない」誤謬の一つと数えたが、しかし、「スコラ流の迷妄」に対してそれが「良貨をもつて支払つたとまではいえないにしても、ともかく悪貨を非難攻撃した功績」は、これを認めている[1]。ダランベールもまた、

「荒唐無稽な世論が染込んでいるときには、人類の悪弊を匡正するために、ひとは時には、よりよいことをなしえないならば、それに代うるに別な誤謬を以つてすることを余儀なくされる」といい、デカルトの誤謬を、子供のもつ「危険な武器を取り上げるための玩具」になぞらえているが、「本有観念」のかかる誤謬のいみについて彼の述べているところは、今日「本有的」というその名称のもつ意味――顕在的―潜在的、偶然的―必然的等々の――を云々する場合にも、前以つて先ず第一に顧慮されねばならない点を指し示しているように思われる。すなわち、「本有観念を認めることによつて、彼は疑いもなく誤つたのだつたが、しかし、感官による観念の起源についてペリパトス学派が教えていた真理のみを彼がその学派から受取つていたとするならば、そのとき何もかも混同してしまうことによつてその真理を傷つけたところの誤謬は、なお一層抜き難かつたことであろう」[2]、と。要するに、これは、デカルトのあの理性主義的な「本有観念」の説、ひいては彼の「単純性質」乃至「絶対者」（原因、相等、普遍者等やまた延長、図形、運動等々）にかんする認識説――「確実にして明証的な認識」――一般にたいして、それを今日通常行われているように後の経験主義的認識論等と同列の問題次元において取扱うこと、を禁ずるものである[3]。こゝで私はこの問題に深くは立入らないが、かゝるアプローチへの端緒の一端として、差し当り、彼の理性主義的推理にも拘らずデカルトの理論内容に影響を与えたところの、のみならず彼の機械的自然観の成立事情に光をあてゝくれるところの、当時の技術学的状況に一瞥を与えておこう。

当時「航海は一層高度な通商のロマンティクであつた」とヘーゲルもいつているが、その海上貿易のための航海術は、コペルニクス宇宙系の成立（一五四〇年頃）以前から既に、太陽を中心とした天界図を用いて、惑星の蝕の観察により経度の決定を行なつていたといわれる。で、実際上の失敗による一層の精密さへの技術的社会的要求は、惑星についてその位置の観測をティコ・ブラーエに課し、その運行の法則をケプラーに発見させた（一六〇九年）といえよう。同様にまたオランダ航海士によつて既に使用されていたものを改作した（一六〇九年）望遠鏡により、ガリレーは、周知のごとく、木星の衛星やまた太陽の黒点およびその自転を観察発見することによつて、それまでは実際上の便宜的仮説として認められていたにすぎないコペルニクス宇宙系に客観的確証を与えた。かかる技術学的状況は、デカルトの屈折光学のみならず、ひいては彼の解析幾何学そのものにとつても無縁のことではない。この間の事情については後に少しく立入つて述べようと思うが、皮相な事実だけとしても、当時航海士によつて既に用いられていたアラビヤ式の地図はデカルト坐標の表記上の範型であつたといわれ、また解析幾何学の基本的なことは散発的な形では既に航海術上すでに見出され使用されていたといわれる。

その他、とくにオランダにおける港湾、運河、堤防等の構築のために巨大な石や水の重さにたいして人々が挑戦せねばならぬ必要から、固体と流体との静力学が要望されたこと[4]。また、抛物線を画く弾道の研究から、後にデカルトによつても定式化された「惰性の原理」にもとづく動力学が着手されたこと[5]。さらに、採鉱のための坑道から水を排出しそこへ空気を送入する必要から排水ポンプが完成され、排気ポンプが組立てられ[6]、ひいては真空、空気の重さ、晴雨計発見への道が開かれたこと。これらはすべて周知の事実であつて、実に、《社会が技術的要求をもつとき、科学は十もの大学によるよりも、それによつて助成される[7]》と更めていわざるをえない。これはエンゲルスの言葉であるが、しかし、ここで序でながら言及しておきたいことは、最近まで多くのマルクス主義哲学者が屢々論じてきたごとき、社会の経済的土台と自然科学理論との直接的連関を主張する議論には賛成できないことである。右に述べた技術学的発展にしても、それは屢々「資本主義的な」とされるところのも

のであるが、最近までのマルクス主義者的議論のみによつては、それが、専ら絶対王制確立過程におけるもともと封建的な政治目的の用にも本質的に供せられえたことの事由の、説明がつかない。[8] また、かりにデカルトが当時の経済的土台を洞察し、もしそれに彼の自然研究を直接に結びつけたとしても、否、そうしたとしたら、その研究は必ずや全くの混乱に終つていたことだろう。一般に、経済的土台における一定の変化は生産力の変化を介して間接的に技術学、自然科学――これは何よりも先ず客観的自然を対象とする――の発展と結びついていると考えるべきであろう。

ところで次ぎに、以上述べたごとき当時の技術学的成果が避け難く従来の自然観乃至世界観と確執し、やがて経済的土台そのものの変化を通じてそれらに決定的な変化を蒙らせて行つた歴史的事実の端緒的現われについても、あらかじめ一言しておきたい。試みに動力学の形成を一例にとつてみれば、これもまたその端緒においては、飽くまでもアリストテレス的法則によつて砲弾運動を説明せんとしたタルターリア、カルダーノ等の、一世紀にも亘る努力の失敗として現われている。[9] かゝる失敗、また、経験的になし遂げられていた技術学的発見にたいするスコラ学者たちの無関心、さらにそこから結果する無知なるが故の危機、これこそ、私がさきに若きデカルトの危機と呼んだものに通じるものである。「というのは、私はかくも多くの疑問や誤謬によつて困惑していたので、ますます自分の無知を見出すこと以外には、修養の努力を積み重ねても、何らの甲斐もないように思われた。[10]」なお、新自然学思想への蠢動のこの転期において、経験的技術からの学問的理論の相対的独自性の故に、かえつて、ギリシャ数学や古代原子論への復帰的継承が行われたことなど、論ずべきことは多いが、こゝでは一先ず再びデカルトその人の許に還ろう。

デカルトが学問を一般に「確実にして明証的な認識」と規定したことは、彼がラ・フレーシュ時代数学を「それの持つ理論の確実性と明証性との故に[11]」とりわけ好んだということからしても、彼の学問研究の方法が屢々いわれる通り主として数学のそれを範としていたことを示している。ところでデカルト自身もいつているように、当時数学はたゞ主として築城術、土地測量、地図作成、機械使用等「機械的技能にのみ仕えるもの」と思われていたこと、さらに当時ジェズイット神父によつて使われていた数学の教科書が極めて混乱した陳腐な表記表による『イエス会のユークリッド』であつたこと、これらの事実を考えるならば、かかる数学教育を通して、しかも「それの根柢が極めて堅牢、極めて確実であるのを洞察する」ということ自体既に、デカルトの全天才を必要としたものと想像される。すなわち、数学の論証に学的な確実性、明証性を見出したこと自身彼の発見にかゝるわけである。しかも、ラ・フレーシュ時代なお数学について「それの真の用法を悟つていなかつた」デカルトは、後日、直線、円、円錐曲線に研究分野を限つていた古代人の狭隘さに驚き「幾何学に受けいれることのできる曲線は何か」を検討し、「最も複雑な線も除外すべきではないこと」を悟り、その例として「反射光学、屈折光学の理論に甚だ有用な」或る種の卵形線の説明を与えるに到つている。[12] したがつて、以上こゝに、築城術等の技能から相対的に独立しているその限りにおける数学独自の発展、ならびに、光学を介しての航海術と解析幾何学との関連が共に見出されるわけである。

さらに、こゝで一概に言つてしまえば、デカルト哲学、とくにその自然学の幾何学的、機械論的性格は、もとをたゞせば、当時の新技術がまさに幾何学と機械学とを特に要求していたというその歴史的事実に由来していると言えよう。そこで次ぎには、彼の機械的自然観について――それの成立に纏わりつく宗教的、神学的困難については次節以下にゆずつて――単刀直入にその結論的な姿に言及しておこう。それは、在来の自然概念のいわば俗化の結論に外ならない。

「その例として、人間の技（l'artifice des hommes）で組立てられた多くのものが役立つた。というのは、職人（artisans）の作つた機械と自然（nature）だけが組立てた種々の物体との間には、何らの差異も認められず、そこに見出される相異は、たゞ、機械（machines）の働らきのよる管や発条やその他の装置の仕掛けが、それを作る手とある比をもつべきところから大きなもので、その形状や運動が肉眼に見えるほどでなければならないのに、他方、自然物（corps naturels）の働らきのからくりになる管や発条というものは大低吾々の感官では見えないほど小さいということだけである。で、機械技術（mécaniques）の規則はすべて自然学（physique）に属するのであり、そのかぎり、人工的な（artificielles）ものはすべて自然的な（naturelles）ものである。例えば、時計がその歯輪で時を示すのは、一本の樹が実をつけるのと同じく全く自然のことなのである。[13]」

当時哲学の一部門としての「自然学」とはなお一般には専らスコラ自然学をいみしていたのであつて、一六三八年メルセンヌ宛の一手紙においてもデカルトは、「自然の諸現象の説明」をば、「抽象的幾何学（la géométrie abstraite）」と対照させて「今一種の幾何学（une autre sorte de géométrie）」と称しているが[14]、今や、機械技術学上の個々の諸規則を秩序づけてこれらをすべて「自然学」に属せしめることによつて、新らしき機械学に学問としての資格を与えたといえよう。その過程は右に示された如く機械と自然との間の類比によるものである。だが、それはたんに、人間の感官に対する、それら両者のからくりの相対的大小によるばかりではない。実は、かえつて、この主張のもつ歴史的真意は、機械を組立てる職人、すなわち人間の領域から自然的諸物体を組立てるスコラ学的「自然」の領域へと、かかる侵入を、たんなる吾々の感官の感度を尺度として遂行し、スコラ的自然観を駆逐することにあつた。そこで、ひとたび機械的自然観が哲学的位置まで高められるや、したがつて、リシュリューのかの一見相撞着するかにみえる政策――すなわちブルジョワジーの助成とユグノーの抑圧、新機械技術の奨励と神学的スコラ自然学の大学における公認と衝突するに到る。前の引用文の典拠『哲学原理』の終節も、それ故、次ぎの如きものなのである。「しかし私は自分を過度に信じたくはないから、私はこゝで何事も確言はしない。私の意見はすべて世の賢い人々の判断及び教会の権威には違背しまいと考えるものである。」そこで吾々も、先ず、デカルトにおける「俗事」と「神事」との区別を次節で瞥見しておかなければなるまい。本節での私の企ては、デカルトの機械的運動の法則そのものには立入らず、「たとえ運動の法則については誤つたとしても、少くとも運動には法則がなければならぬことを初めて洞察したということ」[15]、そして、自然における諸々の運動法則の認識のための基礎とされた、かの理性主義的な「明晰判明な物体概念」が、それにも拘らず、当時の経験的な技術的状況に照応していたということ、これらを示すにとゞまつている。

(1) ヴォルテール、前掲書、第十四信。
(2) ダランベール、『百科全書への序論』、第二部、三。
(3) こうしたいみにおいて、ボルケナウの設問の仕方は、デカルトの認識説へのアプローチの仕方において注目すべきものであると思う。彼は、市民的哲学の三つの根本形式である合理主義、感覚主義、批判主義について、それらを、同一の主題をめぐる三つの様式として問題とする仕方に対して、こう反省している。《Bald aber erwies es sich, dass auch diese Fragestellung noch in der Illusion der Natürlichkeit des bürgerlichen Weltbilds befangen war. Denn Sensualismus und Kritizismus sind blosse Interpretationen des schon als objektive Wahrheit geltenden Weltbilds der exakten Naturwissenschaft, der Rationalismus dagegen seine Schöpfung im Kampf gegen frühere Denkformen, die ihm die Wahrheit bestreiten.》
Borkenau, Franz ; *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild*, 1934, S. Ⅶ.
(4) オランダの堤防監督官 Simon Stevin (ca 1548—ca 1620) は、起重機の

組立ての必要から力の合成の法則を発見し、また、パスカル以前に流体力学について論じている。

(5) これはガリレーに始まり、ついで彼の弟子 Evangelista Torricelli (1608—1647) によつて弾道学にかんする最初の論文が著わされたといわれる。

(6) Robert Boyle (1627—1691) は真空を作る機械を案出したといわれる。

(7) エンゲルス、H・シュタルケンベルク宛の手紙、一八九四年一月二十五日。

(8) 本文中以上に述べてきた海上貿易、鉱山採掘、宗教戦争のための砲兵学、これらの政治目的が主として絶対主義的なものであることは疑いをいれない。問題の事由を絶対王政の過渡的な特質によつて説明することは、こゝでは用をなさない。論点は、自然科学の客観的内容に階級性があるかないか、ということだからである。

(9) デカルトのとくに『気象学』についても、かゝる見地からの考察が望まれるだろう。《Par les Météores je désirais qu'on reconnût la différence qui est entre la philosophie que je cultive et celle qu'on enseigne dans les écoles où l'on a coutume de traiter de la même matière.》—Descartes, *Les Principes de la Philosophie*, Lettre de l'auteur etc.

(10) 『方法叙説』、第一部。

(11) 同書、第一部。

(12) 『幾何学』、第二巻。

(13) 『哲学原理』、第四部、二〇三。

(14) メルセンヌ宛の手紙、一六三八年七月二十七日。

(15) ダランベール、前掲書、第二部、三。

4 神事と俗事

《Il s'agit de battre …… ceux qui mêlent Aristote avec la Bible.》

吾々は前節において機械についての諸々の知識がこれもまた「自然学」なりとして、スコラ自然学と同様の位置、つまり当時における学問の位置にまで高められたことを見た。そして、もともと機械を組立てる職人の領分になぞらえられたこの幾何学や機械学は、やがて「人間的科学」としてそれ独自の領域を劃することとなるわけであるが、ところで、そこに当然伴発されるスコラ自然学の壊体は、——「司祭の説教をそれ以上反省することなしに信仰した」デカルトにとつてみれば——彼の思想の一半をなす在来のカトリック的信仰や神学との関係において困難を惹起するに到るのは明らかである。

「要するに、吾々の推理 (nos raisonnements) が、神の吾々に信じさせようと欲し給うたことと相反する如き如何なることをも説得するものでないことを、吾々はいやでも気付いているのですが、しかし、人間的学問 (sciences humaines) にしか関係しない、そして吾々の救霊には少しも役立たない真理の認識 (la connaissance des vérités qui ne servent point à notre salut) を、聖書から抽出そうとするのは、神の意志に反した目的のために聖書を適用することであり、従つて聖書の濫用であると小生は信じます。(2)」

デカルトが、「吾々の推理」すなわち「自然的推理 (le raisonnement naturel)」によつて獲得される知識を、飽くまで神の意志の範囲内のことゝしながら、しかもそこで主張せんとしていることは、聖書から抽出される「格言」そのものを幾何学や自然学の基本たるべき一般的真理であるかのように誇示していたところの、その当時の宗教的自負に対する攻撃である。換言すれば、当時のカトリック自然学者の「科学的」自負——スコラ自然学への固執——に対するそれに外ならない。こゝから、自然の神聖さが——言つてみれば——毀損されるとともに、「救霊」に資する真理は専ら恩寵に譲られることとなつたのであり、したがつてそれは、「獲得される真理 (les vérités acquises)」と「啓示される真理 (les révélées)」との区別、つまり「神事 (les choses saintes)」と「俗事 (les profanes)」との区別の主張に到るのである。そして、「聖書の濫用」にたいする反対とは、事実上、当時にあつては、とりもなおさず、聖書とアリストテレスとを混同し、ガリレーやまたデカルト

自身の自然学説を非難するに到つたところの、カトリック教会の権威の濫用にたいする反対に連なることであつた。これらはすべて「二重真理」思想乃至カトリック・ルネッサンスの脈絡のうちで理解さるべき事柄である。《es ist Vorurteil, dass die Reformation nur Trennung von der katholischen Kirche,——Luther hat die katholische Kirche ebenso sehr reformirt.》(Hegel)

デカルトは、彼の「新世界」の創造の経過を説明するにあたつて、この現世界のではない、ある仮託の世界のものとしてそれを語つていることは次節に述べる通りであるが、その場合、彼は、いうまでもなく、スコラ自然学の基礎的な命題は、これを公然と放棄している。すなわち、デカルトは、「物質のうちには、学校で論ぜられているような、いかる形相も性質も何一つ存しないのだということを、のみならずその認識が吾々の精神に自然に内在していないようなものは凡そ何一つ存しないのであつて、知らぬ振りさえできぬ位のものであることを、仮定した」[3]。当時のスコラ学によつて諸物体の作用原理とされた「実体的形相 (les formes substantielles)」やまたそれら諸物体の特性の規定原理とされた「実在的性質 (les qualités réelles)」が少くとも物質的な諸物体について——仮託的にではあるにせよ、明らかに (expressément) ——否定されたわけである。例えば、スコラ学によつて地球の構成物質がもつていると考えられたところの常に下に向う傾向、つまりいわゆる gravitas (pesanteur) は「神によつて少しも与えられなかつたと仮定さ」[4]れ、また、デカルト的物心二元論以前に心の植物的乃至感覚的作用の原理と考えられていた「植物的精神 (âme végétante)」乃至「感覚的精神 (âme sensitive)」についても、「そのいかなるものをも注入することなしに、神は人間の身体を形づくつたのだと仮定さ」[5]れたわけである。ところで、これは、勿論、物質的物体を幾何学的特性のみを有するものとして取扱い、自然にたいして機械学的説明のみを施さんとする意図と、それにもとづくそれまでの彼の成果とにもとづくものであるが、デカルトは、その際、飽くまでも聖書『創世紀』における神による天地「創造の奇蹟を傷つけることのない」ものとして、その限りにおいてそれを主張するのである。で、この主張は、周知の如く、彼自身の「自然法則」にもとづく、神の「正規的協力 (concours ordinaire)」というスコラ神学的な用語のかげに、かゝる用語を表向き放棄することなくしかもそれを俗化することによつてなされるわけである。ところで、彼がその新自然学を、彼の「新世界」を、常に仮定、仮託として述べていることの意味は、専ら、一方スコラ自然学を放棄しつゝ、なおもスコラ神学的用語を介して他方聖書の物語に牴触することを惧れていたところに存する。強いていえば、聖書をスコラ学から純化するところにデカルト自然学が主張されたといえよう。

その成立過程であるいわば仮託の論理に立入るまえに、こゝでなお二つの点についてあらかじめ簡単に記しておきたい。第一は、デカルトの仮託的説明の内容と聖書『創世紀』の物語との関係についてであり、第二は、デカルト神学思想の動因が必ずしも新自然学のみには存しないという点についてである。

「世界はそれが現に有している完全性と同様の完全性をもつて太初に創造され、したがつて例えば太陽、大地、光、星はその時に既に存在していたこと、そして、大地はたんにそれ自身のうちにもろもろの植物の種を蔵していただけでなく、植物そのものが大地の一部を蔽つていたこと、また、アダムとエヴは子供として創られたのではなく一人前の人間の年令に達したものとして創られたこと、これらのことを私は毫も疑いはしない。」かかる明瞭な信仰告白は『哲学原理』[6]中に見られるものであるが、そこにはつゞいてこう言われている。「キリスト教 (la Religion chrétienne) によつて吾々はこのように信ずることを要求されているが、ところで自然的理性 (la raison naturelle) は吾々にこの真理を絶

対的に説得する (nous persuade absolument cette vérité)。というのは、神の全能を考えるならば、吾々は、神の被造物がすべてそれの有すべき完全性を一つ残らず太初からもつていたのだと判断すべきであるから……」。一般に、神の創造したこの現実の世界についての議論をスコラ学者たちの論争に委ねようという(7)、デカルトの皮肉な口吻からしても、また、右に自然的理性によつて絶対的に説得されるといわれているところのこの同じことが、以前には、信仰による確実さ (certain par la foi) に対して人間理性による確からしさ (vraisemblance…selon la raison humaine) をもつものとして述べられているその曖昧な口吻からしても、以上のデカルトの信仰告白は危懼の念による「マスク」であるか否かという論争の的となつているわけであり、またデカルトにおける信仰と理性との関係の動揺過程がしばしば問題とされるわけである。ところが、それはともかくとして、実質上ルクレティウスに大いに教えられているかに見える彼の世界発生論と『創世紀』の物語とが内容上細部に立入れば立入るほど相異なることは否定し難い事実であり、しかも、それにも拘らず、彼が自己の新自然学そのもの並びにそれと信仰的真理との関係を共に基礎づけようとした「自然的理性」による道筋は、――すなわち一方自然現象の合理的説明のための「絶対者」や「一般的規則」を含むとともに他方神の無限性、完全性にかんする「本有観念」を含むところの同一の「人間理性」による道筋は、前の引用文が示しているように、神の全能ということによつて『創世紀』の物語を合理化するとともに、同じその神の全能性によつて、デカルト自然学的な世界発生の場合を――それの現実的な真偽は「人間理性」のみによつてア・プリオーリ(9)には決定されえないにしても――一つの可能な場合として想定し主張させたのであつた。

次ぎに、以上これまでの立論がすべてデカルトの自然研究、自然学についてそこからなされているところから、彼の神学思想が直接にこれのみによつてスコラ神学から変形されたかのごとき、かゝる誤まつた予想が生みだされないとも限らないので、こゝに念のため一言記しておきたいと思う。当時における個々の自然研究、技術的研究は、たゞそれらのみとしては、デカルト自然学に一般化されるべき素材ではあるにしても、彼の神学的哲学そのものにとつては、たんにその形成の一条件にすぎないように思われる。カトリック教会の秩序のうちに閉じ込められていた人格が、その秩序――これは社会的なものであるし、また一定の技術的発展にもとづくものであるが――との対立において、「啓示される真理」、神自身への真接的な愛、魂と神との生き生きとしたコミュニカチォへと駆られたとき、たしかに、その「ある争いから生まれた、信仰深きキリスト者の不幸な意識は、相反する二つの仕方で深まつた。一方、その意識は、過去に向い、福音時代への愛惜の念によつて、聖書と予言者への復帰によつて、真理との直接的なすなわち魔術的な関係の探究によつて、また宗教的愛の対象の、はげしい心像による直接的な喚起によつて自己を表わした。他方、その苦悩は、既成秩序の批判、思考及び認識の分野におけるある一定の探究によつて導かれた(10)」のである。それゆえ、信仰と思考とのかゝる二重の斜傾の途上にデカルトの「コギト」思想を理解し、トマス以前におけるそれの歴史的伝統を強調することは無意味でないばかりか甚だ重要なことでもあると思う。たゞ、こゝでデカルト自然学を問題にしている場合、とくに注目すべき点は、スコラ「人格」の思想からデカルト「コギト」思想への神学的変転の過程において、この過程がトマス以前への復帰という形をとつているにも拘らず、かれの自然研究がスコラ自然学に代わる新しい自然学として、あるいは、一般に学問の方法の典型として、その神学に結び付いているところに存する。それでは、この結びつきはいかにして行われていつたのであろうか。スコラ学における「個体化の原理 (principium individuationis)」の問題から――モンテーニュを介しての――「コギト」思想の

成立を跡づける仕方にならうわけではないが、新旧自然学の交代の道筋を出来るだけ次ぎに跡づけてみたいと思う。

(1) そこにはたんに幾何学や自然学のみならずデカルト倫理学も含まれる。「恩寵が問題になつている神学…この恩寵ということが全然考慮されない道徳的、自然的哲学」(メルセンヌ宛の手紙、一六三七年四月二十七日(?))。
(2) 某宛の手紙、一六三八年八月。
(3) 『方法叙説』、第五部。
(4) 同書、第五部。
(5) 同書、第五部。
(6) その第三部、四五。
(7) 『方法叙説』、第五部。
(8) メルセンヌ宛の手紙、一六三七年四月二十七日。
(9) 後世「ア・ポステリオーリ」に対置されるいみにおいてではなく、むしろ、恩寵の光を待たずにといういみにおいて。
(10) Lefebvre, Henri ; *Descartes*, 1947, p. 71—2.

5　假託の論理

《Car le paradis terrestre est devant nous et non point derrière nous.》 L. Lavelle

もともと一重の真理からの過程を含む前述の真理の二重化とその間に成立する新『世界論』の論行は、スコラ哲学者に対する新説提唱の際に要求される謙遜とも、彼等との論争の煩いを回避する韜晦とも解されるごときものであるが、『世界または光の論』[1]と呼ばれるその表題からしても、それはたんなる謙遜や韜晦の仕業に尽きる問題ではなかろう。dixitque Deus : Fiat *lux* : et facta est *lux*. ガリレーの事件のために公刊を見合わせられたこの論文が書きはじめられて(一六二九年十月頃)から約一年後、デカルトはメルセンヌに宛てゝこう書き送つている。「……光は、これまで私が研究しようとした物質のうちで最も高貴にして困難なものの一つです。というのは、全自然学がそこに含まれているからです。何人の想念をも驚かすことなく、また、一般に受入れられている意見を害なうこともなく私が真理を語ることのできる所以の手立てを見出すために、私は、種々様々の事柄をすべて纒めて考察せねばなりません。[2]」デカルトの世界発生論によれば太陽や恒星から光が生まれるようになつていることは周知の通りであるが、この光の生成の順序にかんする、『創世紀』との矛盾こそ、『哲学原理』にいたるまで、彼の自然学研究の主要な課題の一つとなつていたのである。以下に述べるデカルトの仮託の論理は、何よりも先ず、かかる問題状況のもとに理解されなければならない。

「なお、これらのものすべてに少しく日よけを与えるために、また、学者の間で受入れられている意見について、それらを守つたり、拒んだりすることを強いられずに、それについて自分で判断したところをより自由に語りうるために、私はこの現世界はこれをそつくりかれら学者たちの論争に任かしておこう、むしろ一つの新しい世界で起るであろうことについてのみ語ろう、と決心した」[3]。

すなわち、デカルトは、スコラの「学者たち」が実在的なりとした「この現世界」を、そのまゝに「現世界」として、むしろ仮設的な「一つの新しい世界」に託して、自己の新自然学にもとづく世界創造の理論を主張しようとしたわけである。それでは、当時のスコラ学の伝統の中で、まさにそこから何を手掛りとしてこの主張はなされたのだろうか。それは、スコラ哲学において、有限なこの現世界に対置された「仮想的空間 (les espaces imaginaires)」という概念を手がかり——これが「皮肉な」手立てであるか否かはともかく——として行われる。「それゆえ、暫くの間、あなたがたの思考がこの世界 (ce Monde) の外へ出て

ゆくのをお許し下さい。仮想的空間の中で私が生成させて御覧に入れる全く新しい今一つの世界 (un autre tout nouveau) を見にゆくために。[4]」

しかも、やがて、この仮設的な「一つの新しい世界」「仮想的空間」の事象が新しい実在性を帯び、在来の「現世界」、「実在的空間」はそれまで与えられていた実在性を失つてゆく。というよりも、むしろ、この現世界そのものも新しい自然法則にしばられているということ、この現世界自身まさにデカルトの自然法則に支配される「一つの新しい世界」そのものであるということ、が主張されてゆく。すなわち、スコラ学的世界観の否定への道に外ならない。かゝる斜傾は、デカルトが仮空の天地創造説としてかれの『世界論』を略述した行間に覗うことができる。

「かりに神が多くの世界を創造したとして、そのいずれの世界においても〔それゆえ「この現世界」においても——引用者〕、それらの法則〔自然諸法則——引用者〕はその一つでも守られずにはいないであろう……[5]」。

「この現世界における天空およびもろもろの星の実体・位置・運動その他あらゆる種類の性質で、しかも、私が述べている世界〔「一つの新しい世界」—引用者〕におけるそれらと全く同様に現われてならぬもの、もしくは、少くとも全く同様に現われることのできぬものは、何一つ認められないのである……[6]」。

これは、要するに、デカルトにあつて、聖書にたいする慎重な顧慮から自分の自然学を架空世界のこととして述べようとした、そのことのための仮設、虚構が、もはや空想的な虚構としてではなく、かえつて、現実の観察によつてたしかめられ且つそれの説明原理たりうる科学的な仮設としての意味しか担わなくなつてきていることを示している。しかも、かかる斜傾における論理が、前に示された『創世紀』の物語を合理化する論理と同一の論拠によつていること、すなわち「神の無限なる完全性 (les perfections infinies de Dieu)」という同じそのことに拠つていることは、全く興味深いことである。さらに次ぎには、とくに因果性の概念について、この間の事情に更めて一瞥を与えておこう。

実は、以上述べてきたこの仮託自体がやがて「原因 (cause)」と呼ばれて、こゝに近代的ないみにおける「原因によつて結果を証明すること (démontrer les effets par les causes)」——決定論の原理——が成立してくるのである。この過程は、動物、とくに人間の記述にかんしても、すなわち、「他の事を述べるのと同じ調子で述べるには——というのは原因によつて結果を証明しながら、そうしていかなる種子から、いかなる仕方で、自然はこれらのものを生み出さねばならぬかを示しながらという意味であるが、それには——私は未だ十分な知識を持つていなかつた[7]」といわれているところの問題にかんしても、やがて十分な知識を持つてゆくにしたがつて、同じ方向をとることが同様に示されているといえる。それゆえ一般に、——

「……それらの原因は私が恣に仮定したものであつて、別に明らかな理由があるのではないということが考えられても、しかしやはり、その原因をば、それで説明できる事柄すべての真の原因と信じてよい[8]」ところで、だが、この「真の」ということに、前述の二重真理的な考え、実在と仮想との独特な対称の考えの余波が及んでいる。デカルトにならつて時計と時計師に比喩をかりよう、——ある時計師は、自分の作つたのでない時計の、感覚に現われているある結果、ある部分を見て、それの見えない全体、内部をその結果の原因として推しはかることができる。だがそれを直ちに真実の原因としてよいだろうか。一見同じように時刻を示し外見上何も異つたところがないのに、しかも内の歯車の仕掛がまるで異つているということがありうるのではあるまいか。それゆえさきに推しはかられた原因はたんなる仮想的原因 (causes imaginées)

にすぎないのではあるまいか。「これと同じく神には限りなくさまざまな手段があつてそのどれを使つてもこの世界の事物を今あるように創ることができるもので、ただ人間の精神にはそのどれが使われたのか判らないだけである。[9]」デカルトは難なくこの考えに与する。すなわち、神の万能による、さきの聖書合理化の斜傾に応ずる論理に外ならない。ところが、他方また、救靈を恩寵に委ねることによつてかえつて「人間的学問」を主張するかの意図は、デカルトをして、「仮想的原因」の名のもとにおいてであれ、この新自然学的原因の「人生にたいする効用(utile pour la vie)」を主張させる。

「……医学にしても機械学にしても、また総じて自然学的知識を基とする技能にしても、その目的とするところは、自然の因果系列に従つてしかじかの結果が感覚の範囲に生まれてくるように感覚の事物を按配することにほかならない。で、これは前述の仮想的原因の系列を考えるだけでも差支なくできる[10]」、と。

しかるに、デカルトによれば、さらに、これら仮想的原因は、「私たちの行為の規矩とするに足るだけの」、「私たちの行為の際に毫も疑うことをしないようなものごとと同じ程度の」確かさ、つまり「行為の上の確かさ(une certitude morale)」をもつだけではない。このように考えることは、「真理の確かさを過少に考えてそれを衰すこと」にほかならないのだ。それらの原因は、「ほかには考えようのありえない」ほどの確かさをもつものなのである。「仮想的原因」の名のもとにであれ、かほどまでの確かさを持つ原因を主張することは、やがて実質的には、それらとは内容を異にした在来の「実在的原因」を空虚なりとして否定すること、そして「仮想的原因」として導入された原因に更めて実在性を付与することにならないだろうか。事実、デカルトの場合、前述の「神の限りない完全性」それ自身が、——前述の如く聖書や「実在的原因」の合理化の論拠であるとともに——かえつてまた、その「仮想的原因」のすぐれたいみでの確かさをもとづける形而上学的原理として語られることになるのである。

「神は至上の善、あらゆる真理の源で、その神が私たちを創つたのですから、私たちの授かつた真偽の判別力というものは、もしその使命をあやまらず、しかもそれによつて或る真理が明らかにされたというのでありましたら、過まりに陥いることはありません……[11]」、と。

しかし、こゝではデカルトの形而上学そのものの内容にこれ以上立入る紙数をもたない。

(1)「その論文ではたゞ光について考えていることだけを存分に述べてみようとした」——『方法敍説』、第五部。
(2)メルセンヌ宛の手紙、一六三〇年十二月二十三日。
(3)『方法敍説』、第五部。
(4)『世界論』、全集(アダン、タヌリ版)、第十一巻、三一—三二頁。
(5)『方法敍説』、第五部。
(6)同書、第五部。
(7)同書、第五部。
(8)『哲学原理』、第四部、二〇五。
(9)同書、第四部、二〇五。
(10)同書、第四部、二〇四。
(11)同書、第四部、二〇六。

(一九五三年秋、未完)